

# 日本国一の宮

発行所 全国一の宮会  
〒633-8538  
奈良県桜井市三輪1422  
大神神社内(全国一の宮会事務局)  
TEL 0744-42-6633  
FAX 0744-42-0381  
編集 全国一の宮会事務局

**第 六 号**

## 【令和五年度 会務】

### 【令和五年度後期役員会開催】

於 北海道神宮

去る三月八日、令和五年度後期役員会を蝦夷地一之宮 北海道神宮(間島誉史秀宮司)にて開催。コロナ禍前まで恒例としていた翌年度総会開催地区での事前役員会は五年振りの開催となり、新木直人会長(賀茂御祖神社宮司)はじめ役員一四名の出席を得て行われた。

当日は役員会に先立ち北海道神宮に正式参拝。その後、春の光刺す中とは云え未だ雪深い拜殿前にて記念撮影をし、引き続き社務所を会場に後期役員会を開催。恒例により会長が議長となり次の協議が執り進められた。

上皇陛下御製 (平成二十四年歌会始御題 「岸」)

津波来し 時の岸边は如何なりしと

見下ろす海は 青く静まる

①「令和六年度前期役員会 並 総会開催について」

②「役員一部改選について」

であり、昨年度の総会で承認の通り、協議事項①について今回は東日本地区で北海道・東北地区 陸奥国一之宮 鹽竈神社での開催となっており、同神社 大瀧博司権宮司より開催は令和六年八月二十二日、二十三日で、総会・講演会を同神社社務所にて、研修会内容として多賀城跡見学、東日本大震災復興状況視察等を企画している旨 提案があり異議無く承認となった。

協議事項②は鈴木寛治常任理事(大神神社名誉宮司)が本務神社宮司を退任し事務の現場を離れたことにより本会役員退任の申し出があり、議長より会則に則り鈴木常任理

事は近畿地区から選出されていることから後任役員を同じ近畿地区より選出するよう発言があり、その結果、大



【北海道神社頭での集合写真】

社 井上卓朗宮司が推薦され、本役員会にて承認された。尚、役員を選任は会則により総会での承認となることから、次回総会上程承認まで鈴木寛治氏が常任理事を務めることで承認された。

### 【懇親会】

役員会に引き続き懇親会を札幌市内のエルムガーデンにて開催。会長



間島支部長歓迎挨拶

挨拶に続き北海道・東北地区支部長の間島誉史秀理事と吉田源彦顧問(北海道神宮名誉宮司)に歓迎の挨拶をいただき、同地区副支部長高橋晃弘理事(鳥

海山大物忌神社宮司)による乾杯の発声により懇親会を開会。

会場は雪に包まれ陽光差し込むレストランで途中優美なハーブの生演奏が流れる中、北の大地の恵をいただき、和やかな雰囲気の中で懇親が交わされた。途中、本名孝至理事(伊弉諾神宮宮司)より、南あわじ市出身の樋口季一郎中将顕彰事業について紹介があり、暫し説明。樋口中将は先の大戦終戦時に、ソ連による北海道侵攻を阻止したことで知られており、令和四年十月十一日に中将の故郷である淡路島の伊弉諾神宮に軍服・軍刀を手にした等身大の中将銅像が顕彰事業で建立されたことが紹介された。出席者一同、樋口中将をはじめ多くの方々の力によって守られた北の大地にて日々平和を享受することへの有り難さを思い致すなど、有意義且つ楽しい一時を過ごし、締め括りに令和六年度総会開催神社 志波彦神社鹽竈神社大瀧権宮司より挨拶があり、次回宮城県での再会を約し散会となった。



樋口季一郎中将銅像 (伊弉諾神宮)

## 護り伝えていく責務

副会長 鍵 三夫



昨年の新年早々元旦の午後四時一〇分、石川県能登地域に於いて、マグニチュード7.6、最大震度7を観測する「能登半島地震」が発生しました。その影響で津波そして火災も発生し、これにより多くの尊い命が失われるなど、壊滅的な被害がありました。神社関係でも、社殿の倒壊を始め関連施設に多くの被害が報告されておりま

す。被災された皆様が復旧・復興に懸命に努力されていた最中の九月、今度は再び同地域が「集中豪雨」により、土砂崩れ・河川の氾濫による家屋の流失等、重ねての被害がありました。ここにお亡くなりになりました皆様に哀悼の意を表しますと共に、被災されま

した皆様に対し心から御見舞申し上げます。私共も十三年前の「東日本大震災」で被災しておりますだけに、これからの能登の皆様方の一日も早い復旧・復興を祈るばかりであります。

さて、「一の宮」につきましては、ご承知の通り、古代の律令体制から中世の封建社会へと移りつつあった平安時代の末期から鎌倉時代の初期に、諸国の国司が赴任時に一番最初に参拝したり、国庁の在庁官人が社司を務めていたり、社殿の造営や祭祀を各国が行った各国第一の鎮守社であり、中央政府よりも各国の国府と関わりが深かった神社であります。そのため、「一の宮」は社格といつても社内社のような国家が定めた社格ではなく、国々の事情に合わせて自然発生的にできた社格であり、国によつては一社だけではないところもあります。陸奥国にありましても、鹽竈神社の他に福島県の都々古別神社(二社)も「一の宮」とされておりま

す。鹽竈神社の創建については詳ら

かではありませんが、平安時代に編纂された『弘仁式』(八二〇)及び『延喜式』(九二七)の各主税式で初見します。この中で、「祭鹽竈神料壹万束」とあり、正税から祭祀料を受けた例は全国でも特例であります。しかも、壹万束という高額は、多賀城が東北一円の行政府として重視されたことに伴い、当社が陸奥国の精神的な支えとして、国家から崇敬され、特殊な待遇を受けていたことを物語っています。延喜式内社に名が見えないのも、当社が式内社を凌ぐ社格であったからともいわれています。

当社への庇護は、鎌倉幕府にとつても引き継がれ、『吾妻鏡』建久元年(一一九〇)二月六日の条には「塩竈以下の神領に入りて狼藉を現す可からず」、或いは建久四年(一一九三)の文書には「一宮鹽竈社」と記されるなど、鎌倉幕府によつても当社が陸奥国を代表する重要な神社と捉えられていたことがわかります。その後の南北朝期以降も、陸奥国の権勢を争

う諸将により競って寄進がなされています。これらを始めとする史料からも、凡そ十二世紀頃には当社を陸奥国一の宮と認識されていたといえま

しょう。近世に入り、当社は仙台藩伊達家によつて厚い崇敬が寄せられます。伊達政宗公は慶長十二年(一六〇七)に当社の造営を竣工させます。このことは、当時、戦乱によつて荒廃した社寺を復興させることが、領内統治のために必要不可欠なことであり、特に中世以来陸奥国一の宮として諸将の精神的支柱であった当社の復興は、政宗公にとつても重要なことであつたわけ

です。このように、当社は朝廷を始めその時代の武将・豪族、庶民によつて崇敬されてきました。

これからも、陸奥国一の宮として、全国の氏子崇敬者の皆様方のお力添えを頂きながら、共に護り伝えていかなければならない責務があります。

(志波彦神社鹽竈神社宮司)

## 【令和六年度 会務】

### 【令和六年度前期役員会】

於、志波彦神社鹽竈神社

令和六年度総会が八月二十二日に陸奥国一之宮鹽竈神社（鍵 三夫宮司）にて開催され、全国各地より役員、関係者四十五名が参会。当日は午前十一時より貴賓館にて令和六年度前期役員会が行われ会長以下役員一六名、事務局三名が出席した。会議は総会審議事項が各上程され、五年度決算とその監査報告、六年度の予算案が審議され各承認された。続いて役員一部改選について上程され、二月の五年度前期役員会で承認となった役員人事を改めて確認し引き続き事務局を大神神社に置くことと常任理事に同神社 井上宮司を推薦することで承認された。また関東地区では支部長であった鹿島則良氏が鹿島神宮宮司を退任されたことにより関東地区より、常陸国鹿島神宮 東俊二郎宮司が新たな理事に推挙され、満場一致で承認。副会長以下役員人事は規則により総会にて会長が指名することとなった。

また令和七年度の総会については

前年度が東日本地区であったことを鑑み、西日本地区での開催となり、近畿地区が担当することと方針を定め、総会は山城国一之宮賀茂御祖神社（新木直人宮司）にて令和七年七月から九月にかけて、その事前打合せとなる令和六年度後期役員会併地区会員合同打合せは令和七年二月に摂津国住吉大社（神武磐彦宮司）で



【鹽竈神社頭での集合写真】

の開催をと近畿地区役員一同より提案があり承認となった。

### 【令和六年度総会開催】

恒例により午後一時より当番神社に参拝。先ず明治時代に鹽竈神社が鎮まる一森山に遷祀された志波彦神社、次に鹽竈神社別宮、続いて左右宮に各代表により玉串が奉奠され一同列拜。左右宮御殿前にて記念撮影し、続いて鍵宮司、大瀧権宮司はじめ職員方により広大な境内をご案内をいただいた。帆手祭などの主要祭典で二〇二段の男坂を約1トンの神輿が下る勇壮な様子を現地で拝聴したり、松尾芭蕉も褒めて已まなかった千賀ノ浦を神域より眺めるなど、一森山の自然観についての説明を受け、特に酷暑であると言われた今年であったが太平洋から吹く涼風を受けながら有意義な参拝となった。続いて大講堂にて総会を開催。利根副会長による開会の辞に続き神宮遙拝、国歌斉唱、物故会員に対し黙祷が捧げられた。会長挨拶の後、新木会長が議長に選出され議事進行。

第一号議案「令和五年度事業につ



総会 会長挨拶

いて」第二号議案「令和五年度収支決算について」を事務局が説明。辰監事による監査報告があり異議なく承認。続いて第三号議案「令和六年度事業計画（案）」「令和六年度予算（案）」が上程されこちらも承認された。第五議案として「役員一部改選について」が上程され、午前中の役員会で承認された常任理事並び理事（関東地区）候補者について説明がなされ異議無く承認され会長より関東地区支部長に古屋真弘理事（浅間神社宮司）副支部長に東俊二郎理事（鹿島神宮宮司）が指名となり、続いて新木会長より平成十四年より二十余年にわたり常任理事として会務を整理してきた大神神社鈴木寛治名誉宮司を顧問に推挙したいとの発議があり、此方も満場一致で承認され、鈴木名誉宮司より謝辞とともに

これまで一の宮会会務に携わってきたい出が述べられた。(令和六年度総会時承認役員一覧後掲)

その他、令和七年度総会開催について、役員会での審議を踏まえ近畿地区での開催が提案承認され、総会は山城国一之宮賀茂御祖神社にて開催することが発表され、新木会長(同神社宮司)より振るつての参加が呼びかけられた。

又、一之宮により親しみ巡拝してもらえようインターネット、SNSを用いた広報であったり、各神社での企画旅行には一之宮を行程に入れるなどして、広く一之宮について世の中に浸透されるように等、会員より活発な意見提言があり充実した総会となり、小野副会長による閉会の辞により、次第を終了した。

【記念講演会・懇親会】

総会に引き続き、大講堂で宮城県多賀城跡調査研究所 所長 主任研究員 関口重樹先生による「多賀城跡と塩竈」と題して講演会を開催。令和六年に国宝指定された多賀城碑や、奈良時代より北限の官衛として重要な役割を担った陸奥国府と塩竈の地が

政治、文化、信仰にどの様に関わったかを詳述。講演後には復元中の多賀城南門と国宝多賀城碑を現地見学し説明会も行われた。(関口重樹先生論考 別掲)



見学会 多賀城跡復興南門にて

その後、ホテルメトロポリタン仙台にて懇親会を開催。当番神社志波彦神社 鹽竈神社 大瀧権宮司の司会により開会。新木会長の挨拶に引き続き、当番神社 鍵三夫宮司が歓迎の言葉を述べられ、北海道・東北支部長 間島誉史秀 北海道神宮宮司による乾杯の発声により約二時間、懇親を深められた。又、講演会、懇親会には日頃より当会の活動に理解

し賛助いただいている一の宮巡拝会 塩原輝昭代表世話人、村上彰世話人、また全国各地の神社の清掃奉仕を通じて敬神生活の実践を弘め世直し世作りをされている一万のお宮奉仕を主宰する塚田昌久代表と清水有子事務局長も参加され一層賑やかに各地の一の宮談義に花が咲いた。尚、令和七年度の総会は近畿地区が担当であることから、近畿地区支部長 渡邊紘一理事(坐摩神社宮司)より多くの会員に近畿・山城の地へお越しただくようご案内を兼ねた中締め挨拶が述べられ暑い一日の幕を閉じるも、各々散会し杜の都の夜長を楽しまれた模様。



懇親会 鹽竈神社鍵宮司 歓迎挨拶

【研修会】

続く二十三日には恒例の研修会を開催。前日の鎮守府多賀城を中心とする東北の歴史を紐解く研修とは趣を変え、東日本大震災より十年(研修当時で十二年)を経て、被災地の今をこの目で確認し、過去を知り学ぶことにより、未来を託された我々がどの様に行動できるかを考えることが大切であると定め、震災遺構及び関連施設の見学と被災神社参拝を主とする復興状況視察研修を開催。

参加者はホテルメトロポリタン仙台よりバスに乗車。震災遺構 仙台市立荒浜小学校と被災復興神社である 関上湊神社(伊藤英司宮司)を目的地にバスを走らせ、車中ではご自身も被災者として、或いは被災者受入れ側として体験された鹽竈神社 大瀧権宮司、栗生権禰宜より平成二十三年三月十一日大震災発生以降の当時の状況を拝聴。仙台駅より東へ太平洋側に広がる街並みを車窓より見ながら、今ある日常の有り難さ、そして一瞬一瞬を大切に一生懸命生きることの大切さを感じながら目的地へ向かった。

先ず一行は若林区の震災遺構仙台

市立荒浜小学校を見学。同校は海岸より約七〇メートル離れた場所に位置し、津波被害後は近隣の東宮城野小学校にて校務学習を継続していましたが平成二十八年に閉校。明治六年に開校以来約一四〇年の歴史に幕を下ろし、以降校舎は震災遺構として保存され、全国各地から防災減災に資するための学習、研修の場として開放されているとのこと。(開館 午前九時三十分～午後四時・月曜及び第四木曜日・年末年始休館)

当日は二班に分かれて案内員の説明により校舎内を見学、天井に突き刺さる空き缶や校舎に押し込まれる車両の様子など、非日常たる自然の驚異を実感し爪痕を鮮明に残している建物内を一同驚愕しながら見学。屋上から太平洋の大海原を望み、穏やかで恵の源であった海が「荒浜」の名の如く荒れ狂う潮となり校舎の二階部分まで襲ったことを俄に信じがたい気持ちで一同で風景を眺めるとともに、案内員の方々は口々に、思い込みが一番の危険であることを見学者に喚起。「いつも津波はこないから、今回もこないだろう」この油断によって尊い命が犠牲になった



平成23年 大津波襲来時に屋上で救助を待つ方々の様子を伝える記録パネル

ことを繰り返し述べていたのは印象的であり、参加者の中には当時の悲惨な状況や救援を待つ人々の心情を察し時折涙ぐむ者もあった。

次に復興神社視察として名取市の湊神社へ正式参拝。同社は東日本大震災による約九・九mの津波が襲われ社殿はもとより氏子地域一帯が津波で流出。平成二十八年、被災後約九年の時を経て新社殿復興が復興している。同社参拝後に拝殿にて伊藤英司宮司より同社復興の軌跡を拝聴。伊藤宮司によれば氏子区域である閑上地区では大震災により約七五三名もの尊い命を失われ、その



震災遺構 荒浜小学校で説明を受ける会員

中には当時の総代長を始めとする約三〇名も含まれていたという。

伊藤宮司は被災直後の荒涼たる境内を眺め先の見えない状況で祀職をこのまま続けていけるのかどうか。熟慮し悩みながらも、神社を再興し地域を復興しようと発起し今日まで奉仕を継続されたとのことを述懐。同社は奈良時代からの歴史を有する古社で、名取川地点に「ゆりあげ五大明王神堂」として祀られたのが起源とされる。今回の境内地復興・社殿再建事業では、先ず元の港町の海沿いであった境内地より約七〇m内陸に高上げした住宅街の中心地に



研修当日 荒浜小学校屋上より太平洋を望む

遷座。地域神社総代や復興協力者等が計画を練りに練り社殿再建に先立ち平成三十年に伊勢の神宮式年遷宮撤下材を拝領し鳥居を建立。次いで神域整備の中心となる本殿拝殿の社殿群の再建は大阪市の(株)創建が奉賛の中心となり令和二年十一月に竣功されたとのこと。元々の氏子や住民も避難生活を余儀なくされ現在も故郷に戻らない戻れない家庭もあるが、伊藤宮司の神社が地域の拠り所であるとの信念は崇敬者の共感を呼び、神興の巡幸が再興されるなど祭儀を中心に地域も復興しており、更に現在では神社が地域の防災拠点と

なり安心安全の拠りどころとなっているとのことを説明がなされ会員一同、伊藤宮司を中心とする役員総代関係者の目に見えるハード面の復興に対する努力に敬意を表するとともに、目に見えない精神的な紐帯を大切に神明奉仕し活動される姿に心を打たれた次第であった。

その後、名取川沿岸で三陸水揚げの新鮮な海の幸が味わえる漁亭浜や閑上店で昼食会を行ったのちに解散。各奉務神社へと帰路についた。

今回の研修では十年、二十年と時間を経て遺構の保存方法や人々の意



復興事業について説明される伊藤宮司

識の在り方、どの様に記憶を伝えていくべきかなど考える上で有意義な内容であり、災害を目の当たりにしたとき、どの様に神社が人々に寄り添っていくことが出来るのかを考えさせられるものであった。参加者よりは被災遺構は十数年を経た今は記憶遺産として保存されるが、今後は老朽化の一途を辿っていく。戦地遺構や被爆遺構等、今後の保存についても思いを馳せる方もあった。今回の研修が全国各地に持ち帰られて神明奉仕の一助となることを念じて已みません。



閑上湊神社の社頭

任期		令和五年七月一日～令和八年六月三十日	
会長	(近畿)	新木直人	賀茂御祖神社宮司
副会長	(関東)	利根康教	寒川神社宮司
副会長	(北海道東北)	鍵三夫	志波彦神社 鹽竈神社宮司
常任理事	(九州沖縄)	小野崇之	宇佐神社宮司
理事	(近畿)	井上卓朗	大神神社宮司
理事	(北海道東北)	間島 誉史秀	北海道神宮宮司
理事	(北海道東北)	高橋 廣晃	鳥海山大物忌神社宮司
理事	(北海道東北)	古屋 真弘	浅間神社宮司
理事	(関東)	東 俊二郎	鹿島神宮宮司
理事	(北陸)	渡部 吉信	彌彦神社宮司
理事	(北陸)	藤井 秀嗣	高瀬神社宮司
理事	(東海)	山本 行恭	椿大神社宮司
理事	(東海)	矢田部 盛男	三嶋大社宮司
理事	(近畿)	渡邊 紘一	坐摩神社宮司
理事	(近畿)	本名 孝至	伊弉諾神宮宮司
理事	(中国四国)	鳴瀬 道生	住吉神社宮司
理事	(中国四国)	野坂 元明	嚴島神社宮司
理事	(九州沖縄)	谷川 博之	枚聞神社宮司
理事	(九州沖縄)	田村 邦明	宮崎宮宮司
監事	(東海)	辰 守弘	真清田神社宮司
監事	(北陸)	桑原 宏明	氣比神宮宮司
顧問	神社本庁総長	田中 恆清	石清水八幡宮宮司
顧問	神社本庁長老	千家 尊祐	出雲大社宮司
顧問	神社本庁長老	吉田 健彦	日光二荒山神社名譽宮司
顧問	神社本庁長老・元副会長	吉田 源彦	北海道神宮名譽宮司
顧問	元副会長	打田 文博	小國神社宮司
顧問	元常任理事	鈴木 寛治	大神神社名譽宮司

令和六年八月二十二日

※会則抜粋  
 第五条三項 役員は各地区より選出  
 第五条四項 会長は役員の中から指名し総会に諮り承認を得る  
 第五条六項 役員は任期は三年とする  
 但し任期が満了となっても後任者が就任するまでは、なお存在する

# 一の宮巡拝の創始者・橘三喜——その生涯と巡拝の旅

洪谷申博 (日本宗教史研究家)



洪谷申博先生

## 一、はじめに

橘三喜は一の宮制の復興に尽くし、一の宮巡拝の先鞭をつけた人物である。

当時（十七世紀後半）、一部の国では一の宮は忘れられた存在となっており、その所在さえ不明になった神社もあった。

こうした状況を憂えた橘三喜は、その足で六十八カ国すべての一の宮を巡って実地調査を行ない、その記録を後世に残した。

これによって復興した神社もあり、一の宮の意義も再認識された。

また、その旅日記は当時の一の宮の実態を今に伝える貴重な史料であるばかりか、紀行文としてもすぐれており、これに触発されて一の宮巡礼を志した者も少なくないと思われる。

後述するように、橘三喜には『一宮巡詣記』以外にも『神道四品縁起』『中臣祓集説』『神道あつめ草』といった書物があり、神道家としての名声が高かった。また、歌人としても知られていた。

近代になるとその名声も薄れ、とくに伝記的なことが忘れられていった。歌人で随筆家の森繁夫は『人物百談』（昭和十八年）で「三喜はあれだけの著述をした人物であるに拘はら

ず一向に所伝が少ない」と嘆いている。

森繁夫はさまざまな文献資料にあたって三喜の生涯を調べたが、没年と終焉の地がどうしてもわからなかった。

窮した森繁夫は手当たり次第に「垂教を仰いだ」という。この「乱射の一射が偶々命中し」、東京府府中町の猿渡盛厚氏から教示されることになるのだが、その過程が面白い。すなわち、「猿渡氏から金鑽宮守氏に、金鑽氏から更に埼玉県大宮町の西角井正男氏に照会して頂いた結果である」という。ちなみに金鑽宮守氏は武蔵国二の宮の金鑽神社の宮司を務められた方だ。こうして橘三喜の墓が氷川神社神職武笠家の墓所にあることが判明し、墓石に記された碑文も明らかになった（この墓は現

存している）。

以下、橘三喜の生涯と一の宮巡詣について簡略に述べてみたい。

## 二、橘三喜略伝

橘三喜（美津興志）は寛永十二年（一六三五）に肥前国平戸（現、長崎県平戸市）で生まれた。

父の大鳥居刑部は七郎神社（七郎宮）の神職であったとされる。七郎神社は明治十三年（一八八〇）に、他の三社と共に藩主の霊を祀る霊椿山神社に合祀され亀岡神社となった。この七郎神社について、亀岡神社の公式サイトは「町方の氏神として大勢の人々に信されていた」と述べている。

平戸は中国などとの交易で栄えた街で、十七世紀初頭にはイギリスやオランダの商館も建てられ、国際的な雰囲気があった。明末の英雄・鄭成功も平戸で寛永元年（一六二四）に生まれて



静岡浅間神社・神部神社拜殿

いる。

幕府の鎖国政策により寛永十八年(一六四一)には商館が閉鎖されるが、国際都市としての気風はその後も残った。橘三喜の独特の神道観は、こうした街で少年時代を過ごしたことからよるところが少なくないだろう。

その一方で、神職であった父から神道の素養を厳しく教え込まれたらしい。平戸藩主・松浦鎮信(重信、一六二二～一七〇三)もその才能を認め、

明師に従って神道を学ぶことを十六歳の三喜に命じている。

橘三喜の最大の幸運は、松浦鎮信が藩主である時期に平戸に生まれ合わせたことといえる。鎮信は神道や仏教、茶道、科学などに明るく、自ら師を招いて学ぶとともに、そうした文化活動を積極的に支援した。橘三喜が神道研究に専念でき、一の宮巡詣という大事業を達成できたのも、鎮信の後援あつてのことであつた。

前引の亀岡神社の公式サイトによると、「神官橘三喜は藩主第二十九代松浦鎮信の命により延宝三年(一六七五)全国各地の一の宮巡詣の旅に出た。帰藩後、在来の神楽に各神社の神楽の粹を取り入れ『平戸神楽』を完成させた」とある。

神道遊学のため平戸を出た橘三喜が、最初に向かったのは静岡であつたとされる。ここで橘三喜は、神部神社の神主・志貴(宮内)昌興(?～一六七一)に師事する。

神部神社は駿河開拓の祖神・駿河の国魂の大神である大己貴命を祀る古社で、駿河国総社。現在は浅間神社・大歳御祖神社とともに静岡浅間神社を構成する神社となつている。

志貴昌興は吉田家の門人であつたので、吉田神道の基本的な教理や行法などを教わつたのであろう。その後、京に出て、吉川惟足や吉田家の教えを受けたともいわれる。吉田神道は「諸教との習合のなかで展開してきた中世の神道説の集大成」(弘文堂版『神道事典』)とされる。橘三喜が仏教などの教理・用語を使って神道を説いたのも、中臣祓を重視したのも、吉田神道の影響であらう。しかし、江戸浅草の平戸藩藩邸に移つて、藩士などに神道を講ずるうちに、彼は独自の信仰を確立していった。これを橘神道という。

そして、延宝三年(一六七五)七月十六日、橘三喜は一の宮巡詣の旅に出た。約十年の中断をはさんだ三期五回、二十二

年にわたる大旅行であつた。延宝四年(一六七六)四月には、藩主の命により、所在地が不明となつていた壱岐国一の宮・天手男神社の搜索も行なつている。

橘三喜は他の地でも不明になつた一の宮などの搜索を行なつているが、そうした比定作業には批判もある。しかし、橘三喜は比定の正確性よりも、祭祀の継続を重要視したのであろう。実際、復興された天手男神社は「国中一般住民の崇敬尊崇も次第に深くなつた。年々の請雨、風止五穀成就の国中祈願祈禱もこの神になされた。その霊験も顕著であるとして神威はいよいよ増輝した」(山口麻太郎「天手男神社」という)。

なお、橘三喜はこの旅で各地の一の宮に中臣祓を奉納しているが、その実物が阿波国一の宮・大麻比古神社に現存している。

橘三喜には多くの門人がおり、墓碑によれば四千七百余

という。一番弟子といふべき存在が武蔵国一の宮・氷川神社の神主、武笠丹波であった。武笠とは鎌を御神体として安座巡行の行を説く弓矢神道を興したともいわれる。鎌を御神体とするのは『中臣祓』に「焼鎌の敏鎌以ちて、打ち掃ふ事の如く」とあることによるといふ。

また、橘三喜は長岡藩（現、新潟県長岡市）第三代藩主牧野忠辰（一六六五〜一七二二）にも神道伝授を行なっている。この所縁から牧野忠辰を祀る蒼紫神社には、橘三喜を祀る一樹神



『一宮巡詣記抜粋』天手長男神社

社も鎮座している。蒼紫（霊神）・一樹（霊神）はともに吉田家から牧野忠辰・橘三喜に贈られた神号である。

また、神道家の増穂残口（一六五五〜一七四二）とも交流があり、増穂は橘三喜の没後、その遺稿を整理し『神道四品縁起』と題して刊行している。

弟子の武笠丹波との交流は晩年まで続いた。武笠を訪ねて大宮を訪れることも多かったようで、武笠邸で療養中に亡くなり、武笠家の墓地に葬られた。元禄十六年（一七〇三）三月七日、享年六十九歳であった。

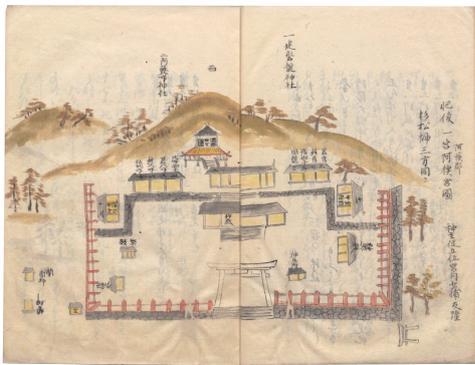
### 三、橘三喜の信仰

前述のように橘三喜には多くの弟子、信奉者がいた。それだけ橘三喜の教えに人気があった証拠であるが、その一方で批判もあった。出雲国二の宮・佐陀大社（佐太神社）の神職で国学者の勝部芳房（一六七二〜一七二七）は、一宮の巡詣で出

雲を訪れた橘三喜について「近キ比橘三喜流トテ学フ人多カリシ」としつつも、「俗学」「理ハ浅ハカ」「愚昧ノ人ヲ語りテ神道ニ引入ル、方便」と批判している。（森繁夫『人物百談』より孫引き）

こうした毀誉褒貶は橘三喜の教えの説き方によるものと思われる。たとえば、彼はこんな風に述べている。

「臨終の時は勿論、常々二六時中、御名号（天照大神の御名のこと、引用者注）おこたらざれば、其功德にて、一切の地獄、



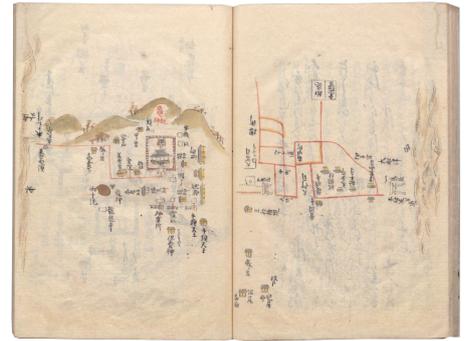
『一宮巡詣記抜粋』阿蘇神社

餓鬼、畜生、修羅等のくるしみをまぬかる。しかるゆへ、神壇の正面には、天照大神を本尊と定め、其脇に仏や聖人の像をおきたくば置べし」『神道四品縁起』（以下同）

仏教の念仏信仰を、そのまま天照大神への信仰に応用していることがわかる。これでは神道の純粋性を重んじる立場からすれば、異端ということになる。

しかし、仏教や陰陽道などの信仰はもはや日本人の日常生活と結びついたものとなっており、それが身に染みついておる庶民に純粋な神道を説いてもなかなか受け入れられない。むしろ聞き慣れた仏教の言葉、世界観を使いながら、日本人なら日本の神を信仰するべきだと説く方が効果的だと橘三喜は考えたのだろう。

「儒教は唐土の神道なり、仏法は月氏国の神道なれば、儒仏を悪しとそしるべからず、月氏国の人ならば、成程勢至や観音と唱へ尤もなるべし、本朝にて理



『一宮巡詣記抜粹』鹿島神宮

非をもわきまふる人、むりに天照大神の御名をすてたがるは、我国の人とは云がたし」  
 だが、神道を重視する理由はそれだけではない。  
 「天照大神は、諸神諸仏の本体」なのであり、「夫れ天地の間に生ずる人は、皆大神宮の子孫なるぞや、高天原の神明より心の神をうけ得、生れて行住座臥、造次填沛、神道しばらくも離る、事なし」だからだ  
 こうした信仰は吉田神道・吉川神道に通じるものだが、天照大神への強い信仰は橘三喜独自のものと見える。

興味深いのはジェンダーフリーの意識ももっていたことだ。  
 「女は罪深くしてたすかりがたしといへども、神の道にはさらさら男女をへだつる事なし、天照太神女体にてまします、是にても知べし」

四、橘三喜の一の宮巡詣

では、『一宮巡詣記』をもとに橘三喜の一の宮巡拝を跡づけてみよう。ただし『一宮巡詣記』の原本は現存していない。享保七年(一七二二)に岡田正利が抜粋して書写したものが伝わるのみで、『一宮巡詣記』の特徴である境内のスケッチも一部が略されている。

以下、紙幅の関係から橘三喜が参詣した一の宮のみを抜き書きする。社名は橘三喜の表記に従い、「」で現在の社名を示す。『〇〇国一ノ宮』などをカッコで囲ったものは原典に表記がないもの。《図あり》は境内のス

ケッチがあるもの、《図略》は岡田正利が図を略したと記すもの。  
 ※以下の文は筆者の注記である。

上巻  
 ○初巻  
 延宝三年(一六七五)七月十六日 肥前平戸を出発

●肥前一ノ宮 川上淀姫社「與止日女神社」《図あり》

●(肥前一ノ宮)千栗村八幡宮「千栗八幡宮」

●筑後一ノ宮 高良玉垂社「高良大社」《図あり》

●肥後一ノ宮 阿蘇宮「阿蘇神社」《図あり》

●日向一宮 都農宮社「都農神社」《図あり》※大友宗麟の焼き討ちにより「僅の小社」となっていたが「年老たる宮守を尋出して、古キ事共語らせ、棟札などを見て」日向国一の宮と判断

●大隅一宮 鹿兒島神社／正八幡宮「鹿兒島神社」《図あり》

●薩摩一宮 和多都美神社／枚聞

神社「枚聞神社」《図あり》

●(薩摩国一ノ宮)新田八幡宮「新田神社」

○二巻

延宝四年(一六七六)一月十六日 平戸を船出して壱岐・対馬に

●対馬一宮 和多都美社「海神社」《図あり》

●壱岐一宮 天手長男神社《図あり》※不明になっていた天手長男神社搜索の経緯が詳しく述べられている

●(筑前国一ノ宮)住吉社「住吉神社」

●筑前一宮 筥崎神社「筥崎宮」《図あり》

●豊前国一宮 宇佐神社「宇佐神社」《図あり》

●「由原山へまかりて」※杵原八幡宮のことか?

●豊後一宮 西寒多神社「西寒多神社」《図あり》※「羽田村の田の中に少し藪あり、内に僅の小社あり、(略)扉を開き尋けるに、西寒多社と書付あり」

○三巻

延宝五年(一六七七)十一月

十三日 安房・上総・下総・常陸へ

●安房一宮 洲崎神社「洲崎神社」

●上総一の宮 玉前神社「玉前神社」

●常陸国一宮 鹿島神社「鹿島神社」

●下総国一宮 香取神社「香取神社」

○四卷

延宝六年（一六七八）四月七日、陸奥の国に趣きけるに

●（下野国一宮）宇都宮二荒山神社「二荒山神社」

●（下野国一宮）日光山権現「二荒山神社」

●奥州一宮 都々古別神社「都々古別神社」※「此所の八幡宮の内陣を開き見るに、奥州一の宮と記せり、（略）然れども此所の郡は石川といふ」

●（奥州一ノ宮）近津大明神「都々古別神社」

●（奥州一ノ宮）鹽竈明神「鹽竈神社」

●出羽国一宮 大物忌神社「鳥海山大物忌神社」

●越後国一宮 伊夜比古神社「彌彦神社」

○五卷

●佐渡国一宮 度津明神社「度津神社」

●武州一宮 氷川大明神「氷川神社」

○六卷

貞享四年（一六八七）四月五日、近き国々の一の宮もふでんとて

●甲斐一宮 浅間社「浅間神社」

●駿府（駿河）一宮 本宮浅間神社「富士山本宮浅間大社」

●相州一宮 寒川大明神「寒川神社」

●（相模国一ノ宮）鎌倉八幡宮「鶴岡八幡宮」

○七卷

元禄九年（一六九六）六月十一日、残りし国の一宮へ巡詣

●（武州一ノ宮）氷川大明神「氷川神社」

●（上野国）一宮貫前大明神「一宮貫前神社」

●（越中国一ノ宮）一宮大明神「高瀬神社？」

●（越中国一ノ宮）立山権現「雄山神社」

●（越中国一ノ宮）氣多大明神「氣多神社」

●（越中国一ノ宮）二上権現「射水神社」

●能登一宮 氣多神社「氣多大社」

○八卷

元禄九年（一六九六）八月朔日

●加賀国一宮 白山大明神「白山比咩神社」

●越前国一宮 氣比社「氣比神社」

●若狭一宮 遠敷社「若狭彦神社」

●丹後一宮 籠神社「籠神社」

●但馬一宮 出石大明神「出石神社」

●但馬一宮 粟鹿明神「粟鹿神社」

●因幡一宮 宇倍神社「宇倍神社」

●出雲国一宮 熊野天照大神宮「熊野大社」

●（隱岐国一ノ宮）由良神社「由良比女神社」

●出雲国一宮 杵築社「出雲大社」

○九卷

●石見国一宮 物部神社「物部神社」

●安芸国一宮 嚴島神社「嚴島神社」

●周防一ノ宮 玉祖神社「玉祖神社」

●（長門国）一宮住吉社「住吉神社」

○十卷

元禄十年（一六九七）三月十二日、平戸を船出し

●（備後二宮）疫隅社「素盞鳴神社」

●備後一宮 吉備津宮「吉備津神社」

●伊予一宮 三島大山祇神社「大山祇神社」

●土佐一宮 高加茂神社「高加茂大明神」

●阿波一宮 大原彦神社「大原比古神社」

●淡路一宮 多賀社「伊弉諾神社」

《図あり》

●讃岐一宮 田村社〔田村神社〕

《図あり》

○十一巻

●備前一宮 吉備津宮〔吉備津彦神社〕《図あり》

●備中一宮 吉備津宮〔吉備津神社〕《図略》

●美作一宮 中山神社〔中山神社〕《図あり》

●播磨一宮 伊和神社〔伊和神社〕《図あり》

○十二巻

●河内国一宮 平岡神社〔枚岡神社〕《図あり》

●摂津国一宮 住吉〔住吉大社〕《図あり》

●和泉国一宮 大鳥社〔大鳥大社〕《図あり》

●紀伊国一宮 日前宮〔日前神社・國懸神社〕《図あり》

●大和国一宮 三輪社〔大神神社〕《図あり》

●伊賀国一宮 敢国社〔敢国神社〕《図あり》

◎伊勢神宮

●志摩国一宮 伊雑宮〔伊雑宮〕

《図あり》

●伊勢国一宮 椿大明神〔椿大神社〕《図あり》

●近江国一宮 建部社〔建部大社〕《図あり》

●山城国一宮 下賀茂社・上賀茂社〔賀茂御祖神社・賀茂別雷神社〕《図あり》

●丹波一宮 出雲社〔出雲大神宮〕《図あり》

○十三巻

●美濃一宮 南宮神社／仲山金山彦社〔南宮大社〕《図あり》

●飛騨国一宮 水無神社〔水無神社〕《図あり》

●尾張一宮 真澄田社〔真清田神社〕《図あり》

●参河国一宮 砥鹿社〔砥鹿神社〕《図あり》

●遠江国一宮 事任社〔事任八幡宮〕《図あり》

●伊豆国一宮 三島社〔三嶋大社〕《図略》

江戸浅草の我が庵に戻りぬ、

【主要参考文献】

神道体系編纂会編、大塚統子校注『続神道体系 神社編』総記(一)、神道体系編纂会、平成十五年(「一宮巡詣記抜粹」所収)

郡順史『信念の神道家 橘三喜』、一の宮巡拝会、平成二十三年

『神道叢説』、国書刊行会、明治四十四年(「神道四品縁起」所収)

森繁夫『人物百談』、三宅書店、昭和十八年

梅田義彦『神道の思想』第三巻〈神社研究篇〉、雄山閣出版、昭和四十九年(「橘三喜が諸国一宮へ奉納したる中臣祓」所収)

式内社研究会編『式内社調査報告』第二十四巻 西海道、皇學館大學出版部、昭和五十三年(山口麻太郎「天手長男神社」所収)

『一宮巡詣記抜粹』の原本は国立公文書館デジタルアーカイブのホームページから閲覧・ダウンロードができる。

<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LAN G=default&BID=F1000000000000>

039344&ID=M20140901195527856  
25&TYPE=&NO=%E7%94%BB%E5%83%8F%E5%88%A9%E7%94%  
A8

執筆者紹介

☆渋谷申博氏(しぶやのぶひろ)

昭和三十五年、東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒。神道・仏教など日本の宗教史に関わる執筆活動をするかたわら、全国の社寺・聖地・聖地鉄道などのフィールドワークを続けている。主な著作に『全国天皇家ゆかりの神社・お寺めぐり』(G. B.)、『眠れなくなるほど面白い図解 神社の話』(日本文芸社)『参拝したくなる!日本の神様と神社の教科書』(ナツメ社)『諸国神社 一宮・二宮・三宮』(山川出版社)『猫の日本史』(出版芸術社)ほかがある。

# 陸奥国府多賀城と塩竈

宮城県多賀城跡調査研究所  
東北歴史博物館上席主任研究員

関口重樹

## 一 多賀城の位置

宮城県の県名の由来は、仙台を中心とした「陸前国宮城郡」が由来とされる。地名としては『続日本紀』に記載があるほか、現沢窯跡(利府町)で「宮城」と刻書された須恵器が出土しており、八世紀前半には存在していたことが明らかとなっている。

宮城県のほぼ中央部に位置する多賀城市は、旧は宮城郡に属し、西で仙台市、北で塩竈市と隣接する。明治二二年の町村制施行により発足した多賀城村がほぼ現在の市域となっている。特別史跡多賀城跡は市の北部に位置する広大な史跡であり、市名はこれに因んで付けられている。

## 二 多賀城とは

多賀城跡は、律令国家東奥の



多賀城跡 (復元中の外郭南門から政庁を望む)

陸奥国に置かれた城冊として国府の跡である。寛文年間に多賀城の創建を記す多賀城陣が発見され、近世以降にその存在は広く知られるようになった。近代に入ると、遺跡としての認知度に加え、政庁跡を「御座の間」

として伝えるなど住民たちの保護意識も醸成していたことから、大正十一年には宮城県第一号の国指定史跡となっている。

本格的な学術調査は、昭和三六年から多賀城廃寺跡、昭和三八年から多賀城政庁跡の発掘調査が開始した。この調査により、建物の配置や変遷を解明することに成功し、多賀城跡と多賀城廃寺が昭和四一年に国の特別史跡に昇格した。

以降、継続的な調査研究により、その全貌は徐々に明らかとなつていく。奈良時代には鎮守府が併置されたこともあつて蝦夷支配のための東北経営地との説が強かった学説も、近年は行政機関としての姿や豊かな文化交流などの遺跡・遺物が発見され、総じて古代東北地方の行政・軍事の中心地との見方が確立し

ている。

なお陸奥国府には「陸奥接察使」鎮守將軍(鎮守府將軍)「陸奥国司(陸奥守)」といった官職が配置されている。これら官職にあつた人物では、大野東人(神龜元年に多賀城を造営)、藤原朝獨(藤原仲麻呂の四男、天平宝字四年に雄隊城・桃生城を造営、天平宝字六年に多賀城を修造)、大伴家持(各地の諸官を歴任(多賀城は最後の赴任(遙任))、坂上田村麻呂(征夷大將軍も任せられ、蝦夷対策に従事)などが名を残す。また光源氏のモデルともいわれる源融・藤原実方・在原行平らも赴任(遙任)した記録もある。

## 三 陸奥国府多賀城

多賀城跡は、仙台平野の北端部の丘陵と低地に立地する。設置にあたっては、国府津となる塩竈の港からほど近く、辺郡との水陸の交通にも便利な地が選ばれたと推察されている。

外間およそ1キロメートル四方を外郭区画施設(築地塀・材



多賀城跡全景

木塚)で囲み、ほぼ中央に約一〇〇メートル四方の築地で囲まれた政庁を置く。政庁では政務や儀式を執り行った。外郭には南辺中央に南門、西辺南部と東辺北部にそれぞれ西門と東門を開ける。政庁と南門の間は南大路を通し、また西門と東門とは城内をS字に通す道路で繋いだ。このほか、政庁の周りの丘陵には実務官衙を配置する。

城外には外郭南門より南北大路が延び、さらにその大路は西に曲がり、東西約一・五キロメートル、南北約〇・九キロメートルの範囲で方格地割の街並みが形成されていた。また南東の丘陵には付属寺院(多賀城廃寺)も造営された。

多賀城跡では、瓦、硯や墨書土器、祭祀具、武器・武具、生産関連用具などさまざまな資料が出土する。これらは多賀城に出仕した官人の用務や生活、さらには古代国家における重要な地方官衙の実像を今に伝える。なかでも多賀城跡の調査研究史を象徴するものとして漆紙文書がある。漆紙文書とは漆容器の蓋として再利用された古文書に漆が染み、地中で腐らずに残ったもので、昭和五三年に日本で初めて多賀城跡で発見された。内容は、米や武器などの請求・貢進文書、計帳、田籍関係文書などがあり、古代の地方の役所の実態を知る好史料となっている。

#### 四 多賀城の創建と変遷

多賀城の創建年代について、多賀城碑には大野東人が神龜元年に造営したことが刻まれている。さらに藤原朝彥が天平宝字六年に大改修したことも記すが、これら創建と改修の年代は『続日本紀』や『日本三大実録』に記載されていない。したがって、多賀城碑は永らく偽作説が盛行していた。しかし、発掘調査から明らかとなった多賀城の変遷が、碑に記された創建や改修の年代とが矛盾しないことが明らかとなり(右記参照)、真作説が通説化した。

- 第Ⅰ期…神龜元年頃から 大野東人による創建
- 第Ⅱ期…天平宝字六年頃から 藤原朝彥による大改修
- 第Ⅲ期…宝龜一一年から 伊治公弼麻呂の乱からの復興
- 第Ⅳ期…貞觀一一年から一十世紀前半頃 貞觀地震からの復興



多賀城碑

#### 五 古代の塩竈

さて、陸奥国府が多賀城に置かれた頃、多賀城の西で松島湾に面する塩竈は、はたしてどのような様相であっただろうか。些か断片的ではあるが、記録や伝承よりいくつかの情報を提示してみたい。

##### 塩竈神社

塩竈神社は松島湾西部・千賀の浦をのぞむ一森山に位置し、古くから東北鎮護・陸奥国一之宮として崇敬を集めた。祭神は別宮に主祭神たる鹽土老翁神、左宮に武甕槌神(鹿島神)、右宮に経津主神(香取神)を祀る。創建年代は詳らかでないが、

『弘仁式』や『延喜式』に「鹽竈神」の祭祀料として「二万束」を授かった記録があり、古代には成っていたことが明らかとなる。ただ、『延喜式』の神明帳

に記される宮城郡内の式内社は伊豆佐比賣神社（利府町）、志波彦神社（仙台市（現在は鹽竈神社と同じ境内に遷宮））、鼻節神社（七ヶ浜町）、多賀神社（多賀城市）のみであり、鹽竈神社は記載されない。ただ当時、祭祀料を寄せられていたのは、ほかに伊豆国三島社二千束、出羽国月山大物忌社二千束、淡路国大和国魂社八百束の三つの式内社のみであり、鹽竈神社は破格の対応を受けていたこととなる。したがって、創建は朝廷による東北統治政策の一つとも推察されている。

**製塩工場としての塩竈（松島湾）**

塩竈が面する松島湾内では、製塩遺構および製塩土器が出土する遺跡が一〇〇以上確認されている。このうち、江ノ浜貝塚（東松島市）で発見された古代

の製塩施設では藻塩焼を行っていたことが明らかとなり、また石帯・ト骨・墨書土器も出土したことから多賀城の官人との関係も指摘されている。

ちなみに多賀城跡では、国府によって塩生産が管理されていた可能性を示す木簡が出土している。このほか「厨」と書かれた墨書や刻書土器に近接して製塩土器が出土しており、宮城那の式内社・鼻節神社で発見された青銅製古印「国府厨印」との関係も注目される。

**藻塩焼神事**

藻塩焼神事は、鹽麗神社の未社・御釜神社（塩竈市）において、七月に三日間にわたって行われる神事である。海藻（ホンダワラ）を用いて濃度の高い塩水（鹹水）を作り、これを煮詰めて塩を作る一連の工程が儀式となる。記録は残っていないものの、古代まで遡るものと考えられている。

なお、前述の江ノ浜貝塚では凝灰岩石組炉や海水を煮詰める

ときにできた漆喰状の塊、灰、焼け土とともに、多量の製塩土器の破片が出土しているほか、漆喰状の塊の周辺からは海藻に附着するウズマキゴカイが焼けた状態で発見されており、当神事と同様の方法で製塩を行っていたことが明らかとなっている。

**国府の湊としての塩竈**

多賀城の東門から東に延びる道路跡がある。城外は宅地され、調査が進んでいないが、いずれ塩竈に至る道路が続いたことは方角的に間違いない。江戸時代の地誌『奥鹽地名集』（寛政四年）に「香津といふ処／右は多賀城国府の津に候や。人家千軒有之由。こう津とは国府の津という事なり。」とあるとおり、古代の塩竈は国府の湊として機能しており、多賀城と東門を通じてつながっていたと推察される。

**都人の憧憬の地としての塩竈**

陸奥の歌枕は、多賀城の創建、そして律令国家の当地への

浸透とともに形成された。塩竈に関係する歌枕としては「きみまさで煙たえにし塩がまのうらさびしくもみえわたるかな」（紀貫之）、「わが背子を都にやりて塩竈のまがきの島のまつぞ恋しき」（よみ人しらず）、「みし人の煙になりし夕よりなぞむつまじきしほがまの浦」（紫式部）などが知られる。

また『伊勢物語』には、河原院が舞台となる「塩竈」（八十一段）がある。河原院は源融の大邸宅で、塩竈の風景を再現した庭園が造営されていた。『伊勢物語』同段では「陸奥の国にいきたりけるに、あやしくおもしろき所々多かりけり。わがみかど六十余国のなかに、塩竈といふ所に似たる所なかりけり。」と記されている。なお、河原院があつたとされる下京区には塩竈町・本塩竈町の地名が残っている。

**六 おわりにかえて**

多賀城跡の大畑地区に志賀家の累代墓地（延宝〜明治）があ



鹽竈神社社頭（中央・塩竈市指定文化財 銅鉄合燈籠：文化燈籠）

る。志賀家は、近江国志賀の出で、口伝では古代に在庁官人を務めたという。さらに中世には陸奥国留守職・留守氏の家臣となり、鹽竈神社の社人筆頭として主要行事の一切を取り仕切る立場に置かれた記録がある。また、江戸時代には鹽竈神社の神職として祝詞の奏上役を担っている。

江戸時代以降、志賀家は多賀城政庁の東にある作貫地区に居宅を置いた。作貫地区を発掘調査すると、古代にはコの字型に配置された官衙があり、また多賀城が廃絶した中世には土塁と空堀で囲まれた館のような遺構が確認されている。志賀家が中世以前も当地に居を構えた記録はないが、多賀城跡のなかでは数少ない「古代から現代まで人の営みが連続的に確認される場所」として注目される。

これまで述べたとおり、古代の鹽竈については伝承や物語が多く、陸奥国府多賀城に関係する明確な記録や遺構・遺物が少ないのが現状である。そのようななか、志賀家と作貫地区との関係をさらに探求できれば、陸奥国府多賀城と鹽竈がより鮮明に明らかになるかもしれない。今後は、このような小さな事例を一つ一つ手がかりとしながら、多賀城と鹽竈の関係、そしてその様相を解明していく必要があるだろう。

全国一の宮会 沿革⑤（平成十九年）

年 代	動 向
平成十九年 二月二十三日	平成十八年度後期役員会並東北地区合同打合せ会開催  於 鹽竈神社 鹽竈神社社務所 (当番神社 鹽竈神社)
八月二十七日 二十八日	平成十九年度総会、前期役員会開催  於 福島県耶麻郡ホテルリステル猪苗代 (当番神社 伊佐須美神社)

☆総会並び研修会の開催は毎年七月〜九月の間に会場を年ごとに移し開催している。開催地は、全国七地区を東日本（北海道東北・関東・北陸・東海）と西日本（近畿・中四国・九州沖縄）に分け東西交互に当番神社を選び、各地の様子を出来るだけ視察研修するようにし開催を心掛けている。

（以降は次号へ続く）

【特集】全国一之宮紹介②

# 鹽 竈 神 社

## 御祭神 鹽土老翁神・武甕槌神・経津主神



鹽竈神社

神馬等を寄進されました。

は古くより東北鎮護・陸奥国一之宮として朝廷をはじめとする崇敬を集め、武運長久の神、また塩業や漁業の守護、とりわけ安産守護の神として全国

津々浦々より信仰されており、

平安初期に編纂された『弘仁式』の主税帳には「鹽竈神を祭る料壹萬束」と記され、当時の陸奥国の正税が六拾萬参千束徴収されていた事から破格の祭祀料を受けていたことが伺えます。

代々の領主の信仰篤く、特に伊達家の庇護を受け江戸時代以降明治維新を迎えるまで歴代の藩主は『大神主』として祭事を司ると共に、社領・太刀・

現在の社殿は、伊達家四代藩主綱村公が元禄八年（一六九一）社殿の造営計画をたて工事に着手され、九年後の五代藩主吉村公の宝永元年（一七〇四）に竣工しました。別宮・左宮・右宮からなる木造素木三間社檜皮葺き流造の三棟の本殿と、別宮・左右宮の朱塗り銅板葺き入母屋造りの二棟の拝殿は、好対照な佇まいを見せております。この三本殿二拝殿の社殿に加え、唐門・回廊・楼門を含む十四棟の建物と石鳥居一基は国の重要文化財に指定されており、

尚、宝永期以降二十一年に一度の社殿の修復、調度品の新調を行う式年遷宮の制度が設けられ現在に至っております。

又、同境内地には、明治四年（一八七二）に国幣中社に御治定され、明治七年（一八七四）にこの地に遷祀された延喜式内名神大社の志波彦神社も鎮座し共に崇敬を集めております。

## 【人事】（令和五年七月一日〜令和六年六月三十日）

〔就任〕

松本 正昭氏	越中国一之宮	射水神社	名誉宮司就任	令和五年 八月
炭谷 淳氏	越中国一之宮	射水神社	宮 司就任	令和五年 八月
鈴木 寛治氏	大和国一之宮	大神神社	名誉宮司就任	令和五年 十一月
井上 卓朗氏	大和国一之宮	大神神社	宮 司就任	令和五年 十一月
岡 康史氏	摂津国一之宮	住吉大社	権宮司就任	令和六年 一月
田中安比呂氏	山城国一之宮	賀茂別雷神社	名誉宮司就任	令和六年 四月
高井 俊光氏	山城国一之宮	賀茂別雷神社	宮 司就任	令和六年 四月
村上 益弘氏	信濃国一之宮	諏訪大社	権宮司就任	令和六年 四月
東 俊二郎氏	常陸国一之宮	鹿島神社	宮 司就任	令和六年 五月
須藤 典子氏	津軽国一之宮	岩木山神社	宮 司就任	令和六年 五月
〔神社本庁定例表彰〕				
○表彰規程第二条第三号（長老）				
田中安比呂氏	山城国一之宮	賀茂別雷神社	宮 司	令和六年 二月 三日
○表彰規程第二条第二号（特級昇進）				
神武 馨彦氏	摂津国一之宮	住吉大社	宮 司	
種子田 敬氏	薩摩国一之宮	新田神社	宮 司	
○表彰規程第二条第一号				
古屋 真弘氏	甲斐国一之宮	浅間神社	宮 司	
甲田 吉孝氏	駿河国一之宮	富士山本宮浅間大社	宮 司	
野坂 元明氏	安芸国一之宮	嚴島神社	宮 司	
安東富士雄氏	豊後国一之宮	柞原八幡宮	宮 司	
○表彰規程第三条第二号				
近藤 亘氏	伊豆国一之宮	三嶋大社	禰 宜	
炭谷 淳氏	越中国一之宮	射水神社	宮 司	
松永 辰男氏	阿波国一之宮	大麻比古神社	禰 宜	
池田 博文氏	讃岐国一之宮	田村神社	宮 司	
大山 晋吾氏	琉球国一之宮	波上宮	禰 宜	令和六年 三月 一日
〔神職階位浄階検定合格〕				
間島誉史秀氏	蝦夷地一之宮	北海道神宮	宮 司	
渡部 吉信氏	越後国一之宮	彌彦神社	宮 司	

## 【帰 幽】（令和五年七月一日〜令和六年六月三十日）

藤井 秀弘氏	越中国一之宮	高瀬神社	名誉宮司	令和五年 十一月十五日
末安 大孝氏	琉球国一之宮	波上宮	名誉宮司	令和五年 十一月十五日
高橋 昭二氏	下総国一之宮	香取神宮	名誉宮司	令和五年 十二月十六日

【コラム】

一の宮を描き続ける

詩情の画家

西田眞人



日展最優秀 内閣総理大臣賞「懐」と西田眞人画伯

西田眞人画伯は昭和二十七年八月生まれで現在七十一歳。日展特別会員、青塔社会員、大阪芸術大学客員教授の肩書きを有されています。画伯は一名「詩情の画家」と称されていますが、その凄味は肩書きだけでは到底知ることはできません。茲に全国一の宮に縁深い西田画伯のことについて改めて関係者に知っていただくたく改めて紹介します。

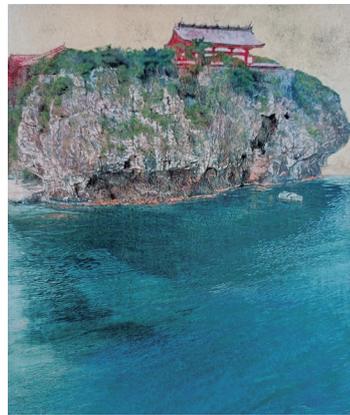
画伯は兵庫県神戸市兵庫区和田岬の出身。和田岬は三韓征討の後に神功皇后が還幸ご上陸された地で三石神社が鎮座する場所。ご出身からも行く行く神様との縁を深くされる予

感を充分に感じます。長じて京都市立芸術大学美術学部日本画科を修められた画伯は日展入選を皮切りに菅橋彦大賞、兵庫県文化賞、神戸市文化賞等を受けられ日本画界に頭角を出されていかれますが、これらの受賞は数々の数え切れない「節」経験を刻まれてきたこと、即ち継続の賜物であるからと自らを回顧されています。画伯の作品が多くの人々の心を揺さぶるのは、画伯が時を大切にし事物と織りなす関係を深く見つめ



海音音 (イギリス)

て、歴史と風土を味わい豊かに描くところにあるのだと謂われています。



波上宮

その画伯の大きな「節」を振り返りますと、出身地である神戸を直撃した阪神淡路大震災があります。画伯が郷土復興への強い思いを題材にされた作品は日展特選となり、その後の連作となり、画伯自身も竹の節の様に「ふし」が続いたと述べられています。また五十四歳の夏、重度の直腸癌が判明し、手術と抗がん剤治療が一年、更に肺への転移も見つかり、肺の三分の一を摘出するのなど、画業にとっても病と向き合った時間をも自らの「節」であったと振り返られております。と言うのも、この闘病期間中、犇めき合うかのように人と人との縁に結ばれ、画伯は一之宮・神社と邂逅します。画伯

は「一の宮」連作として平成二十三年の「波上宮」を皮切りに令和五年九月までに八十六社取材し、本画六十九点が仕上がり、現在も一の宮の信仰を伝えようと情熱的に作画を継続されています。



セイコーハウス 特別展覧会ゲート

今秋十一月七日より十一日の間、セイコーハウスホール(旧名和光ホール)にて「西田眞人展 ふし」と題し作品展が開催されました。同展では令和五年に日展最優秀の内閣総理大臣賞に輝いた「懐(かい)」(インヴァネス、ネス川に架かる橋を題材)をはじめ数々の大作が展示され、繊細な日本画の色彩の中にあつて、風景画に叙情を込めた色を重ねられ見る者を旅路へ誘う作品がホールを埋め尽くしています。そして今回も会場には一の宮連作と画伯自身が蒐集された全国一の宮朱印帳が展示されました。

会場は東京銀座の中心地というこ  
ともあり、海外の観覧者も多く、皆  
さんがじっくりと一画一画に見入っ  
ている姿が印象的で、画廊で作品を



西田画伯一の宮朱印帳



作品解説をする西田画伯(中央)  
と堀秀也氏(左)

解説する画伯の目は輝き言葉は弾ん  
でいました。画との想い出を楽しく  
語られる画伯は、それは懐かしい友  
人と再び出会ったときの様で、特に  
一の宮の作品解説では心素直に神域  
で感じたところに赴き、時を重ねて  
想いを画に投影されてきたことが解  
説より伝わってきます。最新作「荒  
ぶる」(備後国一之宮 素盞鳴神社)  
は豪雨の境内を描写された作品です  
が、社殿と  
森と空気が  
雨が相俟つ  
て神の猛々  
しさ逞しさ  
を感じられ  
てなりませ

が情熱の衰えはなく寧ろ健筆は更に  
揮るわれ、神々との出会いを愉しま  
れており、その画力は神々の世界を、  
そして一の宮の魅力を伝え続けてい  
ます。



荒ぶる一備後国 素盞鳴神社

ん。画伯は  
一の宮と出  
会われ十三  
年。画伯の  
一の宮連作  
は一〇一社  
到達も見え  
てきました

三嶋大社 たたり石を解説する西田画伯

白山さん一白山比咩神社



巖島を解説



望む一洲崎神社

会員関係者各位には西田真人画伯  
のご活動にご注目いただくとも  
に、画伯への変わらぬご声援を宜し  
くお願い申し上げます。  
◎一の宮関係展示記録  
平成三十年十月「詩情の画家 西  
田真人 一の宮を描く展 こころ  
の度第一章」  
(神戸ゆかりの美術館)  
令和元年十一月「全国一の宮展」  
西田真人が描く一の宮の世界」  
(奈良県立万葉文化館)  
令和四年五月「第三回 IN G 兵庫

美術展」に兵庫県内「一の宮」四  
点出品

(あさご芸術の森美術館)  
令和四年十月「西田真人 一の宮  
を描く」  
(二宮市博物館)

令和六年十一月「西田真人展 ふ  
し」に「一の宮」作品十八点出品  
(セイコーハウスホール)

右記の展覧会・個展開催にあつ  
ては、画伯の活動を支援する敬神の  
念厚き堀秀也氏の格別の理解による  
ところが大きく、一の宮連作は「敬  
愛まちづくり財団」が一同に作品を  
保管され、時に展覧会に出陳いた  
き全国一の宮崇敬の念を世に弘めら  
れています。  
尚、令和七年は左記展覧会が開催さ  
れます。

展覧会名：阪神・淡路大震災30年特別展  
「西田真人 日本画展」  
―再生の祈りをこめて―  
会期：令和7年7月19日(土)～  
9月15日(月)【51日間】

会場：神戸ゆかりの美術館  
主催：神戸ゆかりの美術館、神戸新聞社  
特別協賛：(一財)敬愛まちづくり財団  
※全国一の宮作品の展示もごさいます

(文責事務局 高)

頒布品のご案内

【全国一の宮めぐり】(改訂新版)

北は北海道より南は沖縄まで、全国一〇一社を数える一の宮を具に紹介するB6版のガイドブックが昨年度、初版より10版を重ねて改訂新版となる11版が刊行されました。

この事業品は「一の宮の基本的なガイドブックを」との崇敬者よりの声を受け、旅の持ち運びに便利なポケットサイズで、各社の写真と由緒、参拝の交通手段や周辺ガイドやが見やすくも凝縮されており。

自然観豊かに感じる一の宮巡拝は年代層を問わず注目を高めています。是非とも各神社のご社頭で、記念品としてご採用下さいませ。

(会員神社卸価格 〇〇〇〇円) (社頭頒価 〇〇〇〇円)



内容見本

【全国一の宮御朱印帳】①

全国に鎮座する一の宮の御朱印を一冊に授かれる一般的なコンパクトサイズの御朱印帳です。

中には、一の宮の所在地表も同封されており鎮座地を確認することができま

す。

(会員神社卸価格 〇〇〇〇円) 【旅する一の宮】②

「全国一の宮巡拝をもっと気軽に楽しく」をコンセプトに編輯した公式ガイドブック第二弾。巡拝に役立つコラムなど満載。「一の宮」を中心とした「旅」を提案する一冊。

(会員神社卸価格 〇〇〇〇円) (社頭頒価 〇〇〇〇円) 【御朱印帳特製巾着袋】③

御朱印帳(小)がすっぽり入る巾着袋でブルーとピンクの二種。

ブルーは青海波、ピンクは雲立涌の文様に「一の宮」の文字を随所にあしらった気品溢れる柄です。西陣織で奉製しています。

(会員神社卸価格、〇〇〇〇円)



全国一の宮朱印帳と巡拝達成記念品「文庫」について

当会では、「全国一の宮御朱印帳」大小二種【当会オリジナル(小)、一の宮巡拝会(大)】を携えて全国一〇一社の宮巡拝を終えられた方に、巡拝達成記念品「文庫」を贈呈しております。

心を込めて巡拝成された信仰の証である朱印帳を子孫への無言の訓として家宝として永く保存していただけたらという思いから平成二十八年九月より全国一の宮会より各会員神社を通じてお頒けとなります。

各会員神社におかれましては、右当会指定の御朱印帳を持参され巡拝達成報告にお申し出の崇敬者の方には、全国一〇一社御朱印押印を確認の上、条件を満たしていれば左記要項をご記載いただき事務局までご連絡下さい。巡拝達成者の方に「文庫」拝送のお取り次ぎを事務局にて致します。

◎ご連絡事項

①巡拝達成者の氏名・住所・電話番号

②文庫大・小の別

③お取り扱ひ神社名・ご担当者

贈呈開始より令和六年六月三十日迄の約七年間で巡拝達成報告者は三一九名でした。令和六年度(五年七月一日～六年六月三十日)は五十七名より巡拝達成のご報告をいただき「文庫」を贈呈致しました。



各注文先並記念品文庫申込先 〒033-8638 奈良県桜井市三輪1422番地 大神神社社務所内 全国一の宮会事務局 ☎ 0744-42-6633 FAX 0744-42-0381 ●送料別途(負担下さい)

編集後記

◎表紙には、東日本大震災に思いを寄せられた、上皇陛下御製(平成二十四年歌会始)を掲げさせていただきました。

◎令和六年一月一日午後四時十分、最大震度七を観測した石川県能登地方を震源とする地震が発生しました。

◎震源より直線距離約三五〇キロ離れている編集者が奉仕する神社も、普段は強風にも動じない釣燈籠がゆつくりと左右に振れはじめ、初詣で賑わう境内にスマートフォンが非常事態アラートが鳴り響きました。事ではないことが起こった事を実感しました。

◎先ず境内各所を巡回し異常箇所がないか、怪我人はいないかなど連絡体制を取りながら参拝者が混乱に陥らないか心に掛けていましたが、どの様に初動体制を取ればいいのか、現場で参拝者を安全に誘導する心構えが出来ていたのか、今となり当時は振り返ると自身の心構えの未熟さを反省するばかりです。

◎令和三年は東日本大震災発生より十年の節目であり、当初より復興状況視察研修をとの意も込め陸奥国一の宮鹽竈神社での総会開催を試みましたがコロナ禍の真只中であり会務は書面のみ時間が続きました。

◎会報は一〇一社会員を繋ぐ情報共有の場としてあるべきとの編集方針から、令和三年の会報第三号では東日本地区会員皆様より「東日本大震災より十年を経て」と題し当時を振り返っていただきました。

◎各社より賜った玉稿は神社界が、各一の宮がこの大震災にどの様に対処してきたかの道標であると思いつく致すとともに、相手の気持ちに寄り添い、如何なる状況下にあっても「世のため、人のために」と尽くす心構え(心が前である気持ち)を堅持して事に当たらずに後手にならないのだと、三年前の会報から教わります。

◎今年度は三年越しの念願が叶い、東北の地で総会が開催されました。

◎震災遺構 荒浜小学校の屋上から見た青い海は優しく、この場所が津波に飲まれたことが俄に信じがたく美しい風景でした。

◎茲に東日本大震災はじめ、度重ねて列島を襲った自然の猛威に被災された皆様方に謹んでお見舞い致しますとともに速やかなる復旧復興をお祈り申し上げます。

◎小誌の誌面を充実するにあたり、今号も渋谷申博先生には一の宮信仰に係る橘三喜についての論考を、関口重樹先生には今夏の総会講演会の要旨を纏めていただき、律令時代より続く鎮守府多賀城と塩竈の歴史を紐解いて下さいました。厚く御礼申し上げます。

◎会員皆様には引き続き会務に格別のご理解ご協力をお願い申し上げます。

◎令和七年は乙巳年。巳年は再生と成長、変革の歳とも云われます。全国一の宮の御神威が益々高まり平穩無事、豊年満作の良き歳であることを祈り上げ、茲に会報第六号をお届け致します。(高)